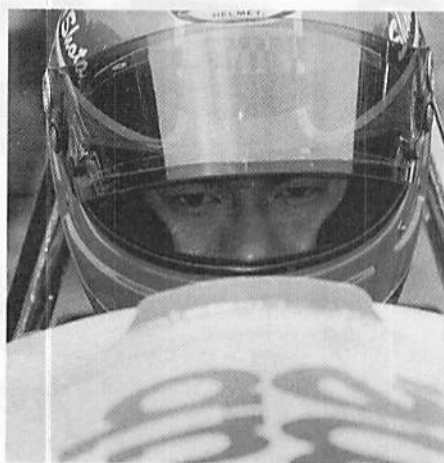
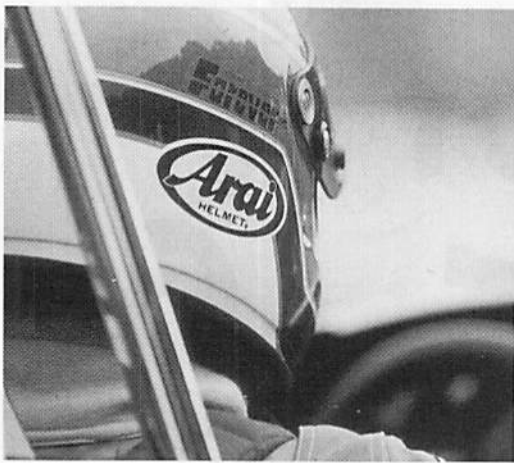


# FJ1600前へ



DIRECTION SHUHEI NISHIZAKI  
TEXT by AKIHIRO KOMIYAMA  
PHOTO by SADAHO NAITO



水野昇太選手を応援して下さる  
スポンサーを募集しています。

(お問い合わせ先)

PEEK-A-BOO RACING

〒604 京都市中京区竹屋町東洞院西入三本木5-464-1

Tel (075) 255-6202

F-3000へのステップアップをめざす FJ-1600レーサー水野昇太の年間追跡シリーズ

## LAP 6 CONFLICT

日本のスポーツ界で世界に通用する選手が育たなくなったと随分前からいわれるようになった。そして、その理由を選手自身のハングリー精神がなくなったからとする傾向が強い。

だが、果たして日本のスポーツ選手は、本当にハングリー精神を無くしてしまったのだろうか。

日本はいまでもなく資本主義国であるが、欧米に比べて文化は経済よりもかなり下のランクに位置づけられている。その文化の中でも特にスポーツに対する評価は低い。なぜ日本ではスポーツがこういった低い位置にいるのか理由を説明することは簡単だ。

世界からエコノミックアニマルと非難されようが、現在でも資本を持つ者は投資するリスクに対して常に見返りを期待する。だから資本を持つ者は、スポーツというものに投資のリスクに対して見返りが期待できるかどうか予測ができないので、スポーツへの評価が低くなってしまっている。それを本音で表すと、こうなるはずだ。「儲かるかどうかからモノに、金をかけることはできない。」

確かにこの本音は、世界に肩をならべる勢いを持つ経済大国ニッポンでは正論かもしれない。そして、バブル崩壊以後の現在のニッポンは、頼みとしていた経済力は退潮傾向にあり、ますます文化、スポーツへの評価は上昇することはなく、逆風気味の風が漂っている。

水野昇太はそんな逆風の中を走り続けている。

時速200キロの猛スピードで走るマシンのコックピットの中、彼は自分の心の中にある強さと弱さの葛藤を繰り返しながら、でぎるだけ冷静沈着に

すべてをコントロールして、誰よりも早く決められた距離のコースを走り抜ける。

非常に少ないのである。戦後48年間、この国に文化らしい文化が何ひとつ生まれなかった最大にして唯一の原因がそこにあり、文化が経済よりも低く評価されている点がある。そこにあるのだ。

「才能はあるのか？」と聞かれれば無いとは決していいません。だってね、誰よりも早く走れる能力があると自分自身を信じてレーサーになったワケですから。だからレーサーとしてマシンに乗り始めたときから今まで、中途半端な気持ちでレースをしたことはないし、もちろんこれからでもないですよ。いつも命懸けてるんです。一般に「命を懸ける」なんていうと大袈裟に聞こえるかも知れませんが、レースはちよつとしたミスが本当に命取りになる。そんな中で誰よりも早く走るためには、

だから非常に卓越した才能を持ちながら、それが現在ではまだ資本を持つ者たちから、金になるかどうか未確認状態の才能」とされている水野昇太はその持てる力を満天下に知らしめたくて、知らしめられなくて、今ギリギリしている。

まず命を投げ出す覚悟が無ければできないんです。命を投げ出すといつても、死んでもいいから刃り構わずムチャクチャに走るのではなく、その覚悟が、逆に生き延びようとする集中力を生み、

「レーサーになったばかりの頃は、先ほどいった3つを充実させて、誰よりも早く走れる実力さえあれば、どんなカテゴリーをアップさせられると思っていました。しかし、それだけでは半人前のレーサーなんです。日本のレーサーはまだ早く走れるだけでは、フ口とはいわれないことが多いんです。時々何が矛盾していると感ずることがありますが、自分の持つ誰よりも早く走れる実力と才能を資本を持つ人たちに十分に認めてもらい、その才能へ投資して貰うことができる者が、たとえ誰かより多少遅く走っても、順調にカテゴリーアップのできる本当のレーサーとなれるんです。だから、悔しいけどそういう意味では、僕はまだ半人前のレーサーなんですよ。」

ニッポンは、金は持っているても余裕がないと諸外国からいわれている。それは戦後の復興のために、エコノミックアニマルに徹した影響が経済大国となった今でも残っている、悲しい現象のひとつなのかもしれない。

水野のレーサーとしての状況は、彼の勝負師としてのベースをつくった剣道でたとえるならば、貧しい剣豪が名工の作った木刀で、金のかかった名刀をもつナマクラ剣士たちを相手に苦戦を強いられているといったところだろう。確かに木刀でも相手の急所を的確にとらえれば相手を倒すことはできるが、ナマクラ剣士の名刀のほうが明らかに殺傷能力は高いのである。確かにここまで彼は木刀の一撃ですべての敵を打ち負かして来た。しかし、所詮木刀では名刀に勝てないときがくるのである。彼は実力と技術はもっている。名に負う名刀さえ持てれば、他のどんな名刀を持つ敵でも倒せる。今の水野昇太の心中はこんなところだろうか「ドライビングテクニクはもとより肉体的タフさは絶対誰にも負けない自信は持っています。この2年間のFJ経験で集中力の持続がコントロールできるようなったし、精神的にもかなり強くなりましたよ。だから同じ条件で走れさえすれば、たとえどんなにカテゴリーが上へいっても、誰にも負けずにトップを取る自信はある。」

その集中力が瞬時の判断が正確にできるドライビングテクニクと結びついてくるんです。この3つが自分の中で充実しているときならば、レースでは今はもう誰にも負けない自信があります。」

物質的にハングリーといわれることはなくなりましたが、ハングリー精神を忘れていない選手はまだニッポンにいます。しかし、資本を持つ者が選手のこの精神に投資価値を見出さないのが、現在のニッポンであり、これが選手たちの本当の世界の壁となっているのだ。



(つづく)